

素義われは

安藤鶴夫

これが活字になる頃は、既に秋風の、いゝ季節でもあらうが、……なんとも暑い。

四角ばつた人形淨瑠璃論でもあるまいと、涼み臺の茶話のつもりで、僕の素義さんげを書くことにした。

むろん傳統のある大阪の五十義會とは較べものにならない證據には、僕が義太夫節の稽古をしたのは學校を出るか出ないかといふ時分で、大阪の五十義會を眞似て、東京の天狗連が檜舞臺とした五十義會の、あれはなん回目になるであらうか、とにかく學校を出たての書生ツぼの僕が初出演で「新口村」を語つて、どうやら番附三段目どころらゐはいくか

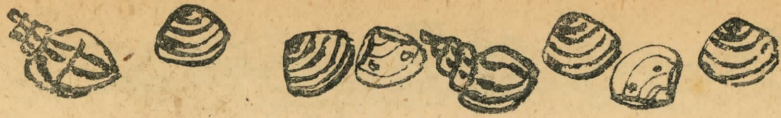
と思つてゐたのが、意外、ちと化けものゝ形に、なんと西の前頭二枚目に据ゑられたのだから、忽ち、どうだらめえもんだらうと天狗になつた。

續いてあと三回、太十、玉三、十種香と、身上ありつたけを出し切つて、四度目の十種香では西の小結に迄昇進して、さらりと引退したものである。

引退といふと體裁はいゝが、だん／＼忙しくなつてきて、稽古をしてゐる時間がなく、自分の家でもつでも樽漬の稽古も出来るといつた油斷や我儘もあつて、つまりは四つしかない語り物を出し切つて、忽ち引退といふのが嘘のないところである。

それにはまた、新婚五目目から寢込んだ女房が、たうとう湘南へ轉地をし、或る時、思ひも掛けず、ラジオで素人放送のテストがあるから出ないかといふ。この頃一寸僕の義太夫を聴きたいと思ふが、まさか、右も左も療養者の家の並んだ中で、三味線の音をさせるわけにもいかず、そこで看護婦と二人相談の結果、素人放送のテストで入選すれば、なんのことはなしに、寢てゐる枕許へ、僕の義太夫が聞えてくるといふ段取りになるといふのである。

結婚以前、凡そ僕の義太夫などに興味を示したこ



とのないものが、そんなことをいひ出すからには、これは並々ならぬ熱心だと感動もし、それにはまた事實病氣も一進一退、始終ひやくしてゐる時でもあつた。

だから、つまりは、病床の女房に動かされて、素人放送のテストへ出掛けたのだが、なんとこの時の審査員の一人に、三宅周太郎氏がゐたのだから、後日甚だ以て冷汗のものとなつた。

銀座の交詢社のホールに於けるテスト場風景は、いまなら差圖目義太夫病患者の録音ものであらう。

計千名に近い素人、玄人、この玄人には一寸説明を要するが、中には東京の花柳界に於ける一流の義太夫藝妓もゐれば、東京の因會ちんかいに屬して立派に入場料を取つて寄席を稼いでゐる者もあり、なん十人と連中を持つてゐる師匠もゐるのだが、俺みたいに巧い者をどうして放送局では頼みにしないのだらうといふ蟲おさへに、當時の演藝課が、さういふ方には是非このテストを御利用下さいといふ企畫だつたので、これを五日ぐらゐに分けて、第一次で百名ぐらゐに振ひ落し、さて第二次を通過したのが愈々放送といふ段取りになるのだが、僕がテスト場へ出掛けて驚いたのは、なんとなん十年の古狸、五十義會

の大關を五回も取つて、文字通り既に引退した古強者などが、ヅラリゐ並んでゐることであつた。

第一次を通過して、第二次通過の通知がきた時には、正直、都新聞社へ入つた時ぐらゐの嬉しさだつた。

定められた日に、當時、まだ愛宕山にあつた放送局へその入選者が集まり、新聞社のラジオ版の寫眞に撮られた時なんかは、そろ／＼止せばよかつたと思つたりしたものだが、たつた六人の入選者の内、因會に屬する玄人が二人、義太夫藝妓が二人、づぶの素人は吉原の貸座敷の主人と僕の二人だつたので、秘かに僕は、その日モーニング姿で現れたその貸座敷の主人と、AKの廊下で堅い握手を取りかしたりしたものである。

八月一日の日曜日、第一放送は野球で、藝術の方が第二であつた事は、今も昔も變りはないが、愛宕山の放送室から、表はぢり／＼とあぶらでりの凄い暑さの午後だつたが、僕は心靜かに本朝廿四孝四段目の切十種香の段を語つた。全國中・野球を聴いて暑がるがよろしい、僕には湘南の病床に唯だ一人聴かせたい者がゐたのだ。

女房はそれを聴いて、その秋死んだのである。



去年、演劇時評のやうな放送をはじめ頼まれた時、この時の僕の義太夫を聴いたらしいともだが、また義太夫かといつた。

僕は一寸ひるんだが、忽ち立ち直ると、今度は師匠ちやアなくつて先生だといつた。但しこの頃の素人演藝放送を聴く度に、僕はあの時を思ひ出し、いやな気持ちになり、すぐにスキツチを切り捨てるのである。このついでにさんげをすれば、それは昭和十二年の、つまりはもう一と昔まへの話である。

聴かれて驚いたのは、杉山其日庵氏と山城少掾である。太十を聴いた其日庵氏からは僕が商賣人になると思はれたらしく、節がよろしい、勉強せいといふお言葉を戴いた。僕は殊更ら商賣人にはなりませんとは申上げなかつた。その傍で、師匠である僕の親父が、さも嬉しさうにしてゐたからである。

山城少掾に聴かれたのは、僕ら學校を出た者だけの若い素人義太夫が會を作り、むろんまだ古靱太夫といつてゐた頃で、その會名を古靱太夫につけて貰つたその淨雲會といふ大會へ、文樂座で東上するの一日二日早目に上京した古靱が一門を引具して、不意打ちに現れた時のことである。

因果と僕は、その日も古靱太夫拜領の肩衣を着けて、なんと奥州安達原三の切袖袷祭文の段を語つてゐて、恰度祭文にかゝらうといふところであつた。

會場の後ろに、そをツと入つてきたあの法師頭をみつたのである。さアもうなにをいつたのか、てんではづつてしまつて、これはもうもうさんさんの體たらくで御簾が降りた。後でほかの人からのまた聞きだと、古靱は聲がいとといつたさうである。

まづ聲を褒められる淨瑠璃に祿なのはあるまい。あれ以來時々、この頃はお語りになりますかと訊かれるのは身を切られる思ひである。

文樂座を退いて、新しい一座を組織しようと虎視耽耽としてゐた晩年の土佐太夫が、米太夫の注進で、八王子の齋藤拳三さんを介して僕に太夫にならんかといはれた奇談もあるが……

去年の暮、なん年振りかでもた安達を語つた時、折口信夫氏が見えられ、途中で噓をされたのを舞臺からみただので、後でお風邪をお召しになりましたかとお伺ひを立てた……

客席に一鑑賞者として坐る場合、さらりと素義を離れる辯もあるが、どうやら暑い茶話になつた。(二二・八・一七)(東京新聞社員)